

絵本と造形・図画工作の基礎・基本と合科的・関連的な授業の考察

－ 2017(平成29)年告示「学習指導要領」と美術教育 －

久保木 健夫

A Study of the Basic Basis and the Lesson to Teach Different Subjects Jointly and Interactively
in a Picture Book and “Expression (Art)” in Contents of Early Childhood Care and Education,
and “Art and Handicraft” in Elementary Schools
－ “The Course of Study” of 2017 and Art Education －

Takeo KUBOKI

キーワード：領域表現、図画工作、絵本、授業研究、合科的・関連的な指導

1. はじめに

(1) 本研究の経緯と目的

2017(平成29)年3月に、『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』『小学校学習指導要領』の全部が改訂され、告示された。保育や小学校教育では、各領域・各教科等の内容を総合的に取り扱い、子ども達が新しい時代を切り拓いていくために必要な資質・能力を育むことによって、「生きる力」を育成することが目指されている。本論では、こうした『学習指導要領』等を踏まえて、保育と小学校教育における今回の改訂で示された方向性と、領域表現(造形)、図画工作の内容とを関連付けて確認する。そして、現在求められる造形・図画工作のあり方や、合科的・関連的な指導及び授業の可能性について考察する。

これまで本研究は、絵本を研究対象として、美術教育の観点から、絵本の絵や絵本画家に着目し、子どもの成長に有益に働く絵本の意義を明らかにする研究を行ってきた。そして、絵本研究を通して、保育と小学校教育の研究も続けてきた。こうした経緯から、本研究でも、造形・図画工作の基礎・基本と合科的・関連的な指導及び授業の研究を行う際に、絵本も研究対象の一つに位置付けて研究を進めることとする。なお、本論は、総合的な視点から合科的・関連的

な指導及び授業の研究を行うが、造形・図画工作の基礎・基本は堅持して考察することを原則としている。

(2) 本研究と先行研究

周知の通り、保育や小学校においては、中学校以降の授業のように、各教科等の担当教員が授業を行う教科担任制を採用している学校は、全国的には比較的少ない。一人の担任教員が保育の全領域や小学校の全教科等を担当する学級担任の形を採用する学校が多数を占めている。そこには当然、保育の専門性や小学校全科という専門性が存在する。

保育内容・領域表現(造形)や小学校図画工作における研究では、美術あるいは美術教育を専門とする研究者による授業や指導法の研究が推進されている。それは造形・美術の専門性に基づいた授業や指導法等の研究も必要だからである。また、現在では絵本に関する研究は、絵本学という研究分野も確立されている。その他、教育に関する研究では教育学、保育に関する研究は保育学、子どもに関する学際的な研究は子ども学等、枚挙にいとまがない。

このように、現在は各分野で研究が推進され、精緻化・専門化されて、保育の専門性、小学校教育の専門性、各教科教育等の専門性、絵本の専門性という具合に、それぞれの専門分野が確立されて存在している。こうして確立され

た専門分野における見方・考え方、等が、一方で、授業や内容、指導法を研究する際の問題点を複雑化し、研究を困難にしている要因の一つになっていると本論では考えている。

こうした点に美術教育における問題点を見出し、議論を行った記録として、1997年に美術科教育学会が発行したフォーラムの記録集『中学校美術教育は積み過ぎた方舟か』が存在する¹⁾。新井哲夫、大嶋彰、山口喜雄、天形健、川島芳子、宮下幾子、宮脇理、宮坂元裕らによって行われたこのフォーラムの中で、山口喜雄は、公立中学校美術科教員と小学校図画工作科教員という双方の勤務経験から、教科ごとに授業を担当する中学校教員の意識と、一人の学級担任が全教科等を担当する小学校教員の意識や考え方のズレを指摘した報告を行っている。

この問題については、現在まで数多くの研究が積み重ねられている。最近の美術教育における研究成果の中で、筆者が直接確認できたものでは、美術科教育学会リサーチフォーラムの記録集『美術科教育における〈学習者×教師〉一質の高い授業構築をめざしてー』(科学研究費成果報告書²⁾)や、2017(平成29)年9月23日・24日に開催された「日本教育大学協会全国美術部門・大学美術教育学会・広島大会(全国大学造形美術教育教員養成協議会・同時開催)³⁾」、「日本美術教育連合・第51回日本美術教育研究発表会2017⁴⁾」、等をあげることができる。この他にも、当然ながら美術教育以外の研究成果も含めて、数多くの研究成果が存在する。本論は、こうした先行研究を踏まえて考察を行う。

2017(平成29)年3月に、『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『認定こども園 教育・保育要領』『小学校学習指導要領』の全部が改訂された。本論はこの新しい学習指導要領等に対応した形で考察する。絵本と領域表現(造形)・図画工作の基礎・基本と合科的・関連的な指導や授業の可能性について、この新しく改訂された学習指導要領等と対応した形で考察した研究は、現在のところ、まだあまりなかったと考えられる。本論は、これまでの研究成果を踏まえ、この新しい学習指導要領等に対応した形で、こ

の問題を考察し、指導や授業を充実・発展させ、高めていくことを目的としている。

2. 平成29年3月告示『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』改訂のポイント

平成29年3月に告示された『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』の改訂について、本章では、『3法令ガイドブック⁵⁾』を参考にして、その概要の項目を一覧の形で確認する(表記はテキストの通りとした)。

(1)『幼稚園教育要領』改訂のポイント

- 1 前文が加わる
- 2 幼稚園教育を通じて育みたい資質・能力と初等中等教育(幼・小・中・高)を通じて育成を目指す資質・能力との関係
- 3 育みたい資質・能力と各領域、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿との関係
- 4 資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントの実現
- 5 満3歳児への指導
- 6 小学校教育との接続に当たっての留意事項
- 7 全体的な計画の作成と指導計画の作成、実施と評価、個から集団へ学びの過程を捉える
- 8 資質・能力を育むための主体的・対話的で深い学びの必要性
- 9 評価の充実
- 10 障害のある子ども、海外から帰国した子ども
- 11 幼稚園における指導体制の充実
- 12 保育内容5領域について
- 13 家庭・地域との連携・協働

(2)『保育所保育指針』改訂のポイント

- 1 乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実
- 2 非認知的能力の意味&愛着行動、基本的信頼感、自己肯定感
- 3 非認定的能力、社会情動的スキルの伸ばし方
- 4 環境を通じた教育・保育
- 5 養護と教育の一体的展開

- 6 全体的な計画
- 7 保育所保育における幼児教育の積極的な位置付け
- 8 学びの芽生え、学びの支援（指導計画の作成の際の考え方）
- 9 育みたい資質・能力の三つの柱
- 10 幼児期の終わりまでに育ちが期待される 10 の姿
- 11 「乳児保育に関わるねらい及び内容」
- 12 領域という考え方と乳児の保育の領域の記述
- 13 「内容の取扱い」の記述
- 14 「1 歳以上 3 歳未満児の保育に関するねらい及び内容」
- 15 「3 歳以上児の保育に関するねらい及び内容」
- 16 幼保小連携の強化
- 17 「子どもの健康支援」
- 18 「食育」の重視
- 19 「災害への備え」の項の新設
- 20 地域の育児支援の重視
- 21 キャリアパスの明確化と研修の重視

(3) 『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』改訂のポイント

- 1 発達の連続性とそれに応じた学びの連続性
- 2 教材研究
- 3 「幼保連携型認定こども園の教育及び保育の目標」
- 4 幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿
- 5 全体的な計画の作成(指導計画の作成を含む)
- 6 指導計画の作成における保育教諭等の協力
- 7 新入園児や他の保育施設等から移行してくる子どもに対する配慮
- 8 異年齢の子どもによる活動
- 9 在園時間が異なる子どもがいることへの配慮（子ども一人一人の園生活の流れを含む）
- 10 登園する子どもと登園しない子どもがいる期間中の配慮
- 11 2 歳児の学級から移行する子どもと 3 歳児から入園する子ども同士のつながり
- 12 「乳児期の園児の保育に関するねらい及び内容」
- 13 「満 1 歳以上満 3 歳未満の園児の保育に関するねらい及び内容」

- 14 「満 3 歳以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容」
- 15 保護者に対する子育ての支援

3. 平成 29 年の改訂と保育の方向性 — 『幼稚園教育要領』を手がかりに—

(1) 平成 29 年の改訂と保育の方向性について

周知の通り、平成 29 年 3 月に、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』の全部が改訂され、告示された。現在の保育の方向性は、幼稚園、保育所、こども園等にあり方が多様化する中で、状況も複雑化し、全体像も捉えづらくなっている。しかし、今回の改訂では、幼稚園、保育所、こども園の改訂を三つ同時に行うことによって、その目標や内容に整合性が図られた。

そこで本論では、そのうちの一つである『幼稚園教育要領』を軸にして、今回の改訂の方向性を確認することで、現在の保育の方向性についても、およその形で推測し、把握することにして、本論で『幼稚園教育要領』を軸にする理由は、必要となる参照すべき資料が、他と比較して数多く入手できたことによる。今後、『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』についても同様に、可能な限り資料を収集し、より正確に、具体的に詳細な保育の内容や方向性等の理解に役立つ研究を進めていきたいと考えている。

(2) 『幼稚園教育要領』改訂の方向性

『幼稚園教育要領』の今回の改訂では、学校教育の始まりとして、小学校以降の学習指導要領との整合性及び連続性が図られている（本論巻末資料（1））。そして、各学校段階と同様に、幼稚園教育において育みたい資質・能力（「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」）が明確化された。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10 項目）が示されたことが、今回の改訂の保育における特徴である⁶⁾。この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小学校と共有し、保育と小学校教育の接続を推進する

ことが求められている⁷⁾。

(3) 幼稚園教育の基本

基本的に従前通りの内容で、大きな変化がある訳ではないが、小学校教育と同様に、幼稚園教育においても、今回の改訂では、幼児期における「見方・考え方」が示された。幼児期は、幼児一人一人が異なる家庭環境や生活経験の中で、自分が親しんだ具体的なものを手掛かりにして、自分自身のイメージを形成し、それに基づいて物事を感じ取ったり気付いたりする時期である。このような「見方・考え方」を働かせることが、幼稚園における学びの中心として重要であるとして、幼稚園教育の基本とされた。

さらに続けて、保育の基本、幼稚園教育の基本と考えられる内容について、次に確認する。

①教師の役割の中に教材の工夫（教材研究）を行うことの重要性が改めて示された。教科書のような主たる教材を用いることはないが、直接的・具体的な体験を重視する幼稚園教育における幼児の主体的な活動の展開は、教師の環境の構成にかかっている。教師が日常的に教材を研究することが極めて重要だと示された。

②幼稚園教育において育みたい資質・能力については、幼稚園教育の特質から、個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で一体的に育むことが重要だと、従前通りに示された。

③幼稚園教育では、環境を通して行う教育を基本としていること、家庭との緊密度が他校種と比べて高いこと、預かり保育などの教育課程以外の活動が、多くの幼稚園で実施されていることなどから、教育課程を中心に、教育時間の終了後等に行う教育活動の計画、学校保健計画、学校安全計画などと関連させ、一体的に教育活動が展開されるよう全体的な計画の作成を位置付け、カリキュラム・マネジメントを充実させることが重要だと示された。

(4) 幼稚園における教育課程の役割と編成等

①幼稚園教育における「主体的・対話的で深い学び」は、幼児期の教育における重要な学習としての遊びの充実の中で実現されることとさ

れた。

②言語活動の充実、見通しや振り返りの重要性、視聴覚教材等の活用といった現代的な諸課題等を踏まえた指導についても示された。

③幼稚園教育における評価は、幼児一人一人のよさや可能性を評価するこれまでの幼稚園教育における評価の考え方を維持しつつ、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことが明記された。

以上、これらの事項は、幼稚園教育に限らず、保育全般に関わる内容が数多く含まれていると考えられるだろう。

4. 平成29年3月告示『小学校学習指導要領』改訂のポイント

(1) 『小学校学習指導要領』「総則」の改訂

『小学校学習指導要領』に示されている内容は、各教科等を含めて多岐にわたる。小学校教育全体における改訂のポイントについては、本論では「総則」に焦点を当てて把握することとする。ここでは、『初等教育資料2017年5月号⁸⁾』に掲載された「総則」の改訂のポイントを参考にする。

また、この中から、幼稚園から小学校、中学校教育までを見通した改訂のポイントに関する資料「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」を、本論巻末資料(2)として巻末に抜粋して掲載した。この資料を見ると、各学校段階を見通した今回の改訂の基本的な方向性や考え方がわかる。本論巻末資料(3)には、「総則」の内容構成に関する資料を抜粋している。

今回の改訂でも、「生きる力」の育成という目標が重視された。教育課程の編成を通じて、「生きる力」の育成を具体化し、教育課程に基づいて教育活動を実施することになる。その際、児童に対して、社会の変化に受け身で対応することなく、主体的に向き合い、関わり合いながら自らの可能性を発揮する力を育むこと、そして、多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となる

絵本と造形・図画工作の基礎・基本と合科的・関連的な授業の考察

ために必要な力を育むこと、が重視された。

そのために、次の6つの観点による教育課程や教育活動の改善・充実が必要とされた。

- 1 児童生徒が「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
- 2 児童生徒が「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- 3 児童生徒が「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- 4 児童生徒が「何が身についたか」(学習評価の充実)
- 5 「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)
- 6 「実施するために何が必要か」(教育課程の実施に必要な方策)

こうした改善・充実は、そのために全く新しい取り組みを一から始めるということではなく、現在でも実施されている教育活動や学校運営の先にあるものと示されている。

また、各学校では、次の8つの創意工夫を生かした取り組みが様々に実施されている。

- 1 教育目標の設定
- 2 グランドデザインや学校経営計画の策定
- 3 こうした目標や計画の地域や家庭との共有
- 4 児童生徒や地域の実態を把握するための様々な調査やデータの収集
- 5 年間指導計画や単元、授業ごとの指導案の作成
- 6 総合的な学習の時間について各学校における目標の設定や各教科等との関連付け
- 7 教育活動の改善に向けた組織的な学校運営
- 8 家庭や地域との連携・協働の具体化

今回の改訂で注目された「カリキュラム・マネジメント」については、「教育課程に基づき組織的・計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」が目的だと示されている。

5. 保育内容 領域表現（造形）の基礎・基本

美術教育や芸術・美術の専門分野においては、何を基礎・基本と考えるか、という問題は、詳細に考えるほど意見が分かれて議論の対象になりやすい。本論では、考察を進めるために、保育内容として、これらの『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』に示された内容を、とりあえず基礎・基本として取り扱い、考察の対象とする。そのため、本論における保育内容 領域表現（造形）の基礎・基本については、これら3つの内容を要約し、およその内容にまとめて確認している。

(1)「乳児保育」と3領域及び領域表現（造形）

今回改訂された保育内容 領域表現（造形）は、従前の内容と比較してみても、本質的な内容や考え方には大きな変化は認められない。ただし、今回の改訂では「乳児保育」の箇所が、詳細に記述されて充実し、増大した形で盛り込まれた。また、「乳児保育」に関するねらい及び内容が、3領域にまとめられたことは大きな特徴だと言える（表1）。

乳児保育に関するねらい及び内容（3領域）

- ① 健やかに伸び伸びと育つ
- ② 身近な人と気持ちが通じ合う
- ③ 身近なものに関わり感性が育つ

以上、3つの内容の3領域である。このうち、「③身近なものに関わり感性が育つ」という領域が、最も造形活動の内容と関わりが強い領域だと考えられるが、「乳児保育」においては、従来の領域表現（造形）という「見方・考え方」の再考が求められている。

保育においては、従来、「個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で一体的に育むことが重要である⁹⁾」という幼稚園教育をはじめとする基本が重視されてきた。そして、各学校段階（幼稚園から小学校、中学校、高等学校教育まで）の見通しを持って、今回の改訂は行われた¹⁰⁾。

表1 保育内容 領域表現 対応表

(平成29年告示『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』より抜粋)(筆者作成)

『幼稚園教育要領』	『保育所保育指針』	『教育・保育要領』
なし	「乳児保育に関わるねらい及び内容」(3領域) 健やかに伸び伸びと育つ 身近な人と気持ちを通じ合う 身近なものとの関わり感性が育つ	「乳児期の園児の保育に関するねらい及び内容」(3領域) 健やかに伸び伸びと育つ 身近な人と気持ちを通じ合う 身近なものとの関わり感性が育つ
なし	「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」(5領域) 健康・人間関係・環境・言葉・表現	「満1歳以上満3歳未満の園児の保育に関するねらい及び内容」(5領域) 健康・人間関係・環境・言葉・表現
「ねらい及び内容」(5領域) 健康・人間関係・環境・言葉・表現	「3歳以上児の保育に関わるねらい及び内容」(5領域) 健康・人間関係・環境・言葉・表現	「満3歳以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容」(5領域) 健康・人間関係・環境・言葉・表現

(2) 保育内容 領域表現 (造形) について

今回は、保育に関わる『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』の三つ全部が同時に改訂された。そして、領域表現(造形)を含めた内容の記述に整合性が図られた。保育内容 領域表現の内容は全て同じ文言が記載されている。詳細にみると、本文中の内容の記述に、若干の相違は所々に認められる。例えば、『幼稚園教育要領』では「幼児」「教諭」と記述されている箇所が、『保育所保育指針』では「子ども」「保育士」、『教育・保育要領』では「園児」「保育教諭」と読み替えられて記述されている。

保育に関わる『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』における保育内容は、前述の表1のように、今回3つのまとまりに分類された。およそ、①「乳児保育に関わるねらい及び内容」、②「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」、③「3歳以上児の保育に関わるねらい及び内容」の3つの内容である。保育内容 領域表現(造形)は、その中に位置付けられている。

また、今回の改訂では、「乳児保育に関わるねらい及び内容」と「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」もまた、内容が重なり合う形となっている。ここでも、乳児から幼児、幼児から児童へと成長するに従って、内容も徐々に分化していく形がとられている。

6. 小学校図画工作科の基礎・基本

小学校図画工作科の基礎・基本については、前項の保育内容 領域表現(造形)の基礎・基本をめぐる問題と同様に、意見が分かれやすい問題である。そこで本論では、『小学校学習指導要領』「第7節 図画工作」に教育内容として示されたものを、とりあえず、基礎・基本として取り扱い、考察の対象とする。図画工作における改訂のポイントは、『初等教育資料2017年5月号』を参考にして、次に確認する¹¹⁾。

(1) 「図画工作科」の改訂の方向性

今回の改訂は、平成28年12月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」を踏まえて行われた。

(2) 図画工作科の目標と「育成を目指す資質・能力」「造形的な見方・考え方」

今回の改訂における図画工作科の目標は、次の通りである。

図画工作科の目標

「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに

に、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。〔「知識及び技能」〕

(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。〔「思考力、判断力、表現力等」〕

(3) つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。〔「学びに向かう力、人間性等」〕

図画工作科の目標においても、各教科等と同様に、「育成を目指す資質・能力」の明確化が図られ、(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱で再整理された。

そして、図画工作科における「育成を目指す資質・能力」とは、「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」のことであるとされた。具体的な詳細は、本論巻末資料(5)に掲載した。

また、各教科等で示された「見方・考え方」については、図画工作科においては、「造形的な見方・考え方」と示された。この「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという物事を捉える視点や考え方のこと」であり、「造形的な見方・考え方」とは、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージを持ちながら意味や価値をつくりだすこと」であると示された。

(3) 図画工作科の内容構成

各学年の目標と内容は、従前通り2学年ごとのまとまりで示された。それぞれ「A表現」「B鑑賞」「共通事項」という内容構成である。

①「A表現」(1)「発想や構想に関する事項」

(ア) 造形遊びをする活動における思考力、判断力、表現力等。

(イ) 絵や立体、工作に表す活動における思考力、判断力、表現力等。

②「A表現」(2)「技能に関する事項」

(ア) 造形遊びをする活動における技能。

(イ) 絵や立体、工作に表す活動における技能。

③「B鑑賞」(1)「鑑賞に関する事項」

(ア) 鑑賞における思考力、判断力、表現力等。

④「共通事項」(1)

(ア) 形や色などに関する知識。

(イ) イメージに関する思考力、判断力、表現力等。

⑤「指導計画の作成と内容の取扱い」について

今回改訂された内容については、前述の本論巻末資料(5)に掲載した。

7. 合科的・関連的な指導と授業の可能性

本研究では、図画工作科と各教科等との合科的・関連的な指導や授業、及び総合的な学習の時間とのより良い関係について考察することを目的としている。そのためには、図画工作科と各教科等との接続部分に着目し、その充実を図る研究を行うことが必要だと考えている。そこで本論では、「指導計画の作成と内容の取扱い」を基に、「図画工作科の教科の特性(基礎・基本)に強く関わる内容」と、「各教科等との接続部分(合科的・関連的な指導や授業)に強く関わる内容」とに、だいたいにおいて整理し、考察する。こうした考察が、保育における領域表現(造形)の充実にも繋がると考えている。

(1) 図画工作科の教科の特性(基礎・基本)に関わる内容

もともと、『学習指導要領』「第7節 図画工作」に示された内容全体が教科の特性に関わる内容を示している訳だが、本論では教科内容に焦点を絞り、さらに詳細に検討する。

「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、1の(1)～(6)、2の(1)～(8)、(11)、3、4は、教科の特性に強く関わる内容だと考えられる(本論巻末資料(4))。特に2の(6)に示されている「各学年における材料や用具の取扱い」等は、最も図画工作科の実技教科としての特徴を表している項目だと言えるだろう。

**(2) 図画工作科における各教科等との接続部分
(合科的・関連的な指導及び授業)に関わる内容**

「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、1の(7)は、各教科等との接続部分に強く関わる内容だと考えられる。確認のため、次に抜粋する。

「指導計画の作成と内容の取扱い」1の(7)

「低学年においては、第1章総則の第2の4(1)を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。」

本項で示されている「第1章 総則」第2の4(1)は次の通りである。

「第1章 総則」第2 教育課程の編成

4 学校段階等間の接続(1)

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。」

また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立した生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科間等の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学校以降の教育との円滑な接続が図れるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。」

以上のように、「第1章 総則」「第2 教育課程の編成」においては、学校教育全体や各教科

等の指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にすること、教育課程の編成の基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めること、総合的な学習の時間の目標と関連を図ること、そして、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ること等が示されている。

次に、「指導計画の作成と内容の取扱い」2の(9)では、次の通り示されている。

「指導計画の作成と内容の取扱い」2の(9)

「各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては、思考力、判断力、表現力等を育成する観点から、[共通事項]に示す事項を視点として、感じたことや思ったこと、考えたことなどを、話したり聞いたり話し合ったりする、言葉で整理するなどの言語活動を充実すること。」

この項目では、図画工作科の授業における「表現」や「鑑賞」の活動を通して、より一層の言語活動の充実を図ることが求められている。この項目については、本論の8の(3)で改めて考察する。

「指導計画の作成と内容の取扱い」1の(1)には、次のように示された箇所も存在する。

「指導計画の作成と内容の取扱い」1の(1)

「題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ること。」

このように今回の改訂では、「題材など内容や時間のまとまりを見通す」という方向性が示されると同時に、「造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ること」という図画工作科における学習内容の充実が求められている。

その他、「指導計画の作成と内容の取扱い」

2の(10)では、ICT教育に関する項目も示されている。

「指導計画の作成と内容の取扱い」2の(10)

「コンピュータ、カメラなどの情報機器を利用することについては、表現や鑑賞の活動で使う用具の一つとして扱うとともに、必要性を十分に検討して利用すること。」

今回の改訂では、プログラミング教育を含む情報活用能力等の現代的な課題にも言及されている。今後、こうした今日的な手立てに関する研究も重要になってくると考えられる。

8. 合科的・関連的な指導及び授業に関する研究の可能性に向けて

このように、今回の改訂では、小学校図画工作科における基礎・基本の内容は、従前通りと考えることができる。しかし、それに加えて今回新たに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10項目)が明確化されている。これを手がかりにして、より具体的な保育と小学校との接続部分に関する授業や指導の充実が求められた。保育や、生活科を中心とした「アプローチ・カリキュラム」「スタート・カリキュラム」は、この接続部分の強化に繋がるものである。今後さらに、こうした保育と小学校との接続や、教科横断的な学習を重視することが求められている。

前章の通り、保育において育成を目指す資質・能力は、「個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で一体的に育むことが重要」だと示されている。また、小学校において育成を目指す資質・能力についても、『小学校学習指導要領』『総則』や「図画工作」で明確化されたように、「各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ること」、「総合的な学習の時間の目標と関連を図ること」等が示されている。このように、造形・図画工作の授業においては、こうした合科的・関連的な指導や授業に関する各領域・各教科等との接続部分に関する研究の充実を図ることが重要であり、求められている。

9. 表現媒体としての絵本

(1) 絵本のテーマの多様性

周知のように、厳密に言えば、絵本作品は、本来、学校教育等の教材として製作されたものではない。ただ、その内容が、教材としても相応しいものとして考えられることから、保育現場や教育現場では日常的に取り入れられ、活用されている。そのため、これまで見てきたような各領域、各教科等の枠組みとは別の視点から、自由に絵本は製作されている¹²⁾。その点、「教科横断的な視点」とは、非常によく合致した媒体であり、保育内容や教科教育等に関する研究の抱える課題とは、逆のアプローチから成り立っている。その最近の絵本研究の成果には、「第20回絵本学会大会」等をあげることができる¹³⁾。

保育における絵本は、保育内容の領域言葉をはじめ、健康、人間関係、環境、表現の各領域で取り扱われている。小学校においては、国語科、生活科をはじめ、社会科、算数科、理科、音楽科、図画工作科、家庭科、体育科、外国語科(平成29年改訂より)の他、道徳(平成29年改訂より「特別の教科・道徳」)、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動、等の教育活動の中で取り扱われることがある。

これは、絵本作品が取り扱うテーマが多様であることに起因する。文と絵が複合的に働き合って成立する絵本は、絵本そのものが一つの表現媒体であるため、ある意味で、あらゆるテーマを取り扱うことが可能となるのである。

(2) 絵本と造形・図画工作における各領域・各教科等との接続

絵本はこのように、領域や教科等の枠組みにとらわれずに、自由に製作、表現されている。また、これまで確認してきたように、保育や小学校教育においては、各領域、各教科等の内容はそれぞれ存在する。しかし、保育においては、これらを個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通した総合的な指導の中で一体的に育むことが重要だと示されている。また同様に、小学校においても、「生きる力」の育

成を、教育課程の編成を通じて具体化し、教育課程に基づいて教育活動を実施すると示されている。こうしたことを踏まえて、改めて造形・図画工作における各領域・各教科等との接続について考えてみると、絵本はこの接続部分の内容を考える際に、非常に有効に機能する手だての一つとして存在していることがわかる。

(3) 絵本と言語活動の充実 —鑑賞活動と読書活動の可能性—

『小学校学習指導要領』「第7節 図画工作」の「指導計画の作成と内容の取扱い」2の(9)では、前述(本論の7の(2))で確認した通り、図画工作科の授業においては、より一層の言語活動の充実が求められている。現在、小学校図画工作科をはじめ、保育や各学校段階の美術教育研究においては、従来の重要な柱として考えられてきた「表現」や実技(作品製作)に関する研究と併せて、「鑑賞」教育に関する研究が非常にさかんに推進されている。

絵本は「読み聞かせ」に代表されるように、この「鑑賞」教育と密接に関わる媒体である。美術教育においては鑑賞活動として考えられるが、国語教育等においては、主に読書活動として、従来より推進されている。今後、こうした美術教育における鑑賞活動と、国語教育をはじめとする読書活動等との接続や関連性について研究し、充実を図ることも必要だろう。

10. おわりに

今回の改訂では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに明確化された。このことによって、保育と小学校で、この姿を共有し、接続を推進するという方向性が、これまで以上に一層強く打ち出された。こうした動向を踏まえながら、今後、領域表現(造形)・図画工作における基礎・基本と合科的・関連的な指導や授業に関する研究を行うことが重要だと考えている。また、その有力な手立ての一つとして、絵本を含めた研究を併せて行っていきたい。こうした各領域・各教科等との接続部分に関する研究の蓄積が、授業や指導方法等の充実・発展

に繋がるのである。

参考文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領 平成29年告示』2017年
- 2) 厚生労働省『保育所保育指針 平成29年告示』2017年
- 3) 内閣府、文部科学省、厚生労働省『認定こども園教育・保育要領 平成29年告示』2017年
- 4) 文部科学省『小学校学習指導要領 平成29年3月』2017年

註

- 1) 美術科教育学会 第13回 公開シンポジウム 主催事務局『中学校美術教育は積み過ぎた方舟か』(美術科教育学会主催「第13回 公開シンポジウム記録 1995.9.30. 於 横浜美術館 子どものアトリエ」) 美術科教育学会、1997年
- 2) 隅敦・安江有紗・竹内晋平・長友紀子・藤井康子『美術科教育における〈学習者×教師〉一質の高い授業構築をめざして—』(美術科教育学会リサーチフォーラム in 京都 2016 記録集)、主催：美術科教育学会、共催：科学研究費基盤研究(C)「教科学習に対する若手教員の授業力向上に資する基礎的研究～実技教科を中心に～」(代表：隅敦)、科学研究費基盤研究(C)「教科目標への到達と感性の育みを促す言語活動等を視点とした美術科教育の基盤的研究」(代表：竹内晋平)、後援：京都市教育委員会。
- 3) 「日本教育大学協会全国美術部門・大学美術教育学会・広島大会」会期：平成29(2017)年9月23日(土)・24日(日)、会場：広島大学教育学部〈東広島キャンパス〉主催：日本教育大学協会全国美術部門・大学美術教育学会、後援：広島県教育委員会・東広島市教育委員会・広島大学、企画運営：広島大会実行委員会。(全国大学造形美術教育教員養成協議会・同時開催)。
- 4) 「日本美術教育連合・第51回日本美術教育研究発表会」開催日時：2017(平成29)年10月15日(日)、会場：東京家政大学
- 5) 無藤隆、汐見稔幸、砂上史子／著『ここが

絵本と造形・図画工作の基礎・基本と合科的・関連的な授業の考察

ポイント！3法令 ガイドブック 平成29年告示対応』フレーベル館、2017年

6) 河合優子「幼稚園教育要領改訂のポイント」文部科学省『初等教育資料2017年5月号』東洋館出版社、2017年、p.2～p.13、所収

7) 汐見稔幸、無藤隆／著『平成29年告示 新しい『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領』を読み解く47のポイント』（『保育ナビ』2017年度4月号 特別付録）、フレーベル館、2017年

8) 文部科学省初等中等教育局教育課程課「学習指導要領改訂のポイント 総則」文部科学省『初等教育資料2017年5月号』東洋館出版社、2017年、p.14～p.23、所収

9) 河合優子「幼稚園教育要領改訂のポイント」前掲書

10) 前掲書

11) 岡田京子「学習指導要領のポイント 図画工作科」文部科学省『初等教育資料2017年6月号』東洋館出版社、2017年、p.38～p.49、所収

12) 拙稿「絵本とテーマと美術教育ー美術教育と絵本研究の可能性ー」絵本学会『絵本BOOKEND 2014』朔北社、2014年、p.30～p.33、所収。

13) 「第20回絵本学会大会」会期／2017年5月3日（水）～4日（木）、会場／フェリス女学院大学。「絵本研究NEWS No.59」絵本学会、2017に報告が収録。※筆者も大会に参加。

本論巻末資料(1)『幼稚園教育要領』の改訂のポイント（※筆者による要約）

（河合優子「幼稚園教育要領改訂のポイント」文部科学省『初等教育資料2017年5月号』東洋館出版社、2017、p.2～p.13、所収）

今回の改訂は、学校教育の始まりとして、小学校以降の学習指導要領との整合性及び連続性を図り、「学習指導要領等の枠組みの見直し」「教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す『カリキュラム・マネジメント』の実現」「『主体的・対話的で深い学び』の実現」等、改訂における各学校段階に共通の改善の方向性について、幼稚園教育にふさわしいものとなるように検討が行われた。

総則の改善・充実

・幼稚園教育において育みたい資質・能力（※「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」）を明確化した。
・五歳児修了時までに育ってほしい具体的な姿を「幼児期の終わりま

で育ってほしい姿」として明確化するとともに、小学校と共有することにより、幼小接続を推進する。
・幼児一人一人のよさや可能性を把握するなど幼児理解に基づいた評価を実施する。
・障害のある幼児や海外から帰国した幼児等の幼稚園生活への適応など特別な配慮を要する幼児への指導を充実する。

総則

・幼稚園教育の基本に、幼児期における「見方・考え方」を新たに示した。幼児期は、幼児一人一人が異なる家庭環境や生活経験の中で、自分が親しんだ具体的なものを手掛かりにして、自分自身のイメージを形成し、それに基づいて物事を感じ取ったり気付いたりする時期である。このような「見方・考え方」を働かせることが、幼稚園における学びの中心として重要なものであることから、幼稚園教育の基本に示している。
・教師の役割の中に、教材の工夫を示した。教科書のような主たる教材を用いるのではなく、直接的・具体的な体験を重視する幼稚園教育において、幼児の主体的な活動の展開は、教師の環境の構成にかかっており、教師が日常的に教材を研究することは極めて重要である。
・幼稚園教育において育みたい資質・能力（※前述）は、幼稚園教育の特質から、個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で一体的に育むことが重要である。

教育課程の役割と編成等

・幼稚園教育では、環境を通して行う教育を基本としていること、家庭との緊密度が他校種と比べて高いこと、預かり保育などの教育課程以外の活動が、多くの幼稚園で実施されていることなどから、教育課程を中心に、教育時間の終了後等に行う教育活動の計画、学校保健計画、学校安全計画などと関連させ、一体的に教育活動が展開されるよう全体的な計画の作成を位置付け、カリキュラム・マネジメントを充実させることが重要である。
・幼稚園教育と小学校教育との一層の接続を図るため、小学校教育において、幼稚園教育で育まれた資質・能力を踏まえること、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有することが示された。

指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価

・幼稚園教育における「主体的・対話的で深い学び」は、幼児期の教育における重要な学習としての遊びの充実の中で実現されること。
・言語活動の充実、見通しや振り返りの重要性、視聴覚教材等の活用といった現代的な諸課題等を踏まえた指導。
・幼稚園教育における評価は、幼児一人一人のよさや可能性を評価するこれまでの幼稚園教育における評価の考え方を維持しつつ、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評価によって捉えるものではないことを明記した。

特別な配慮を必要とする幼児への指導。

幼稚園運営上の留意事項

ねらい及び内容 教育内容の改善・充実

- (1) 領域「健康」 多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること。
- (2) 領域「人間関係」 諦めずにやり遂げることの達成感や前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わうことができるようにすること。
- (3) 領域「環境」 正月、わらべうたや伝統的な遊びなど我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむこと。
- (4) 領域「言葉」 言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。
- (5) 領域「表現」 豊かな感性を養う際に、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。

教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項

本論巻末資料(2)「資料 幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」

（『初等教育資料』2017年5月号、文部科学省、2017、p.21～p.23、所収）

1. 今回の改訂の基本的な考え方

○教育基本法、学校教育法などを踏まえ、これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を活かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成。その際、子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視。

○知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等のバランスを重視する現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成。

○先行する特別教科化など道徳教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実により、豊かな心や健やかな体を育成。

2. 知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」

○「何ができるようになるか」を明確化

知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の3つの柱で再整理。

(例) 中学校理科(生命領域)：①生物の体のつくりと働き、生命の連続性などについて理解させるとともに、②観察、実験など科学的に探求する活動を通して、生物の多様性に気付くとともに規則性を見いだしたり表現したりする力を養い、③科学的に探求する態度や生命を尊重し、自然環境の保全に寄与する態度を養う。

○「我が国の教育実践の蓄積に基づく授業改善」

我が国のこれまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化により、子供たちの知識の理解の質の向上を図り、これからの時代に求められる資質・能力を育んでいくことが重要。

小・中学校においては、これまでと全く異なる指導法を導入しなければならないと浮足立つ必要はなく、これまでの教育実践の蓄積を若手教員にもしっかり引き継ぎつつ、授業を工夫・改善する必要。[語彙を表現に生かす、社会について資料に基づき考える、日常生活の文脈で数学を活用する、観察・実験を通じて科学的に根拠をもって思考するなど]

※教員が授業準備などを行う時間を確保するために、16年ぶりの義務標準法改正による計画的な教職員定数の改善などの条件整備や運動部活動ガイドラインの策定による業務改善などを一層推進。

※既に行われている優れた教育実践の教材、指導案などを集約・共有化し、各種研修や授業研究、授業準備での活用のために提供するなどの支援を充実。

3. 各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立

○教科等の目標と内容を見直し、特に学習の基盤となる資質・能力(言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等)や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実する必要がある。また、「主体的・対話的で深い学び」の充実には単元など数コマ程度の授業のまとまりの中で、習得・活用・探求のバランスを工夫することがある。

○そのため、学校全体として、教育内容や時間の適切な配分、必要な人的・物的体制の確保、実施状況に基づく改善などを通して、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立。

4. 教育内容の主な改善事項

○「言語活動の確実な育成」

・発達の段階に応じた、語彙の確実な習得、意見と根拠、具体と抽象を押さえて考えるなど情報を正確に理解し適切に表現する力の育成(小中：国語)

・学習の基盤としての各教科等における言語活動(実験レポートの作成、立場や根拠を明確にして議論することなど)の充実(小中：総則、各教科等)

○「理数教育の充実」

・前回改訂において2～3割程度授業時数を増加し充実させた内容を今回も維持した上で、日常生活等から問題を見いだす活動(小：算数、中：数学)や見通しをもった観察・実験(小中：理科)などの充実によりさらに学習の質を向上。

・必要なデータを収集・分析し、その傾向を踏まえて課題を解決するための統計教育の充実(小：算数、中：数学)、自然災害に関する内容の充実(小中：理科)

○「伝統や文化に関する教育の充実」

・正月、わらべうたや伝統的な遊びなど我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむこと(幼稚園)

・古典など我が国の言語文化(小中：国語)、県内の主な文化財や年中行事の理解(小：社会)、我が国や郷土の音楽、和楽器(小中：音楽)、武道(中：保健体育)、和食や和服(小：家庭、中：技術・家庭)などの指導の充実

○「道徳教育の充実」

・先行する道徳の特別教科化(小：平成30年4月、中：平成31年4月)による、道徳的価値を自分事として理解し、多面的・多角的に深く考えたり、議論したりする道徳教育の充実。

○「体験活動の充実」

・生命の有限性や自然の大切さ、挑戦や他者との協働の重要性を実感するための体験活動の充実(小中：総則)、自然の中での集団宿泊体験活動や職場体験の重視(小中：特別活動等)

○「外国語教育の充実」

・小学校において、中学年で「外国語活動」を、高学年で「外国語科」を導入。

※小学校の外国語教育の充実に当たっては、新教材の整備、研修、外部人材の活用などの条件整備を行い支援。

・小・中・高等学校一貫した学びを重視し、外国語能力の向上を図る目標を設定するとともに、国語教育との連携を図り日本語の特徴やよさに気付く指導の充実。

その他の重要事項

○「幼稚園教育要領」

・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の明確化

「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」

○「初等中等教育の一貫した学びの充実」

・小学校入学当初における生活科を中心とした「スタートカリキュラム」の充実(小：総則、各教科等)

・幼小、小中、中高といった学校段階間の円滑な接続や教科等横断的な学習の重視(小中：総則、各教科等)

○「主権者教育、消費者教育、防災・安全教育などの充実」

・市町村による公共施設の整備や租税の役割の理解(小：社会)、国民としての政治への関わり方について自分の考えをまとめる(小：社会)、民主政治の推進と公正な世論の形成や国民の政治参加との関連についての考察(中：社会)、主体的な学級活動、児童会・生徒会活動(小中：特別活動)

・少子高齢社会における社会保障の意義、仕事と生活の調和と労働保護立法、情報化による産業等の構造的な変化、起業、国連における持続可能な開発のための取組(中：社会)

・売買契約の基礎(小：家庭科)、計画的な金銭管理や消費者被害への対応(小中：技術・家庭)

・都道府県や自衛隊等国の機関による災害対応(小：社会)、自然災害に関する内容(小中：理科)

・オリンピック・パラリンピックの開催を手掛かりにした戦後の我が国の展開についての理解(小：社会)、オリンピック・パラリンピックに関連したフェアなプレイを大切にするスポーツの意義の理解(小：体育、中：保健体育)、障害者理解・心のバリアフリーのための交流(小中：総則、道徳、特別活動)

○「情報活用能力(プログラミング教育を含む)」

・コンピュータ等を活用した学習活動の充実(各教科等)

・コンピュータでの文字入力等の習得、プログラミング的思考の育成(小：総則、各教科等(算数、理科、総合的な学習の時間など))

○「部活動」

・教育課程外の学校教育活動として教育課程との関連の留意、社会教育関係団体等との連携による持続可能な運営体制(中：総則)

○「子供たちの発達の支援(障害に応じた指導、日本語の能力等に応じた指導、不登校等)」

・学級運営や生徒指導、キャリア教育の充実について、小学校段階から明記。(小中：総則、特別活動)

・特別支援学級や通級による指導における個別の指導計画等の全員作成、各教科等における学習上の困難に応じた指導の工夫(小中：総則、各教科等)

・日本語の習得に困難のある児童生徒や不登校の児童生徒への教育課

絵本と造形・図画工作の基礎・基本と合科的・関連的な授業の考察

程（小中：総則）、夜間その他の特別の時間に授業を行う過程について規定（中：総則）

本論巻末資料(3)「資料 学習指導要領（平成 29 年 3 月 31 日公示）における「第 1 章総則」の構成」

『初等教育資料』2017 年 5 月号、文部科学省、2017、p.16、所収）

小（中）学校学習指導要領 ※（ ）内は中学校

前文

第 1 章 総則

第 1 小（中）学校教育の基本と教育課程の役割（「何ができるようになるか」）

1 教育課程編成の原則

2 生きる力を育む各学校の特色ある教育活動の展開

(1) 確かな学力、(2) 道德教育、(3) 体育・健康に関する指導

3 育成を目指す資質・能力

4 カリキュラム・マネジメントの充実

第 2 教育課程の編成（「何を学ぶか」）

1 各学校の教育目標と教育課程の編成

2 教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成

(1) 学習の基礎となる資質・能力

(2) 現代的な課題に対応して求められる資質・能力

3 教育課程の編成における共通事項

(1) 内容の取扱い

(2) 授業時数の取扱い

(3) 指導計画の作成等に当たっての配慮事項

4 学校段階等間の接続

(1) 幼児期の教育との接続及び低学年における教育全体の充実

(1) 義務教育 9 年間を見通した計画的かつ継続的な教育課程の編成)

(2) 中学校教育及びその後の教育との接続

(2) 高等学校教育及びその後の教育との円滑な接続)

第 3 教育課程の実施と学習評価（「どのように学ぶか」「何が身に付いたか」）

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

(1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

(2) 言語環境の整備と言語活動の充実

(3) コンピュータ等や教材・教具の活用、コンピュータの基本的な操作やプログラミングの体験

(4) 見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動

(5) 体験活動

(6) 課題選択及び自主的、自発的な学習の促進

(7) 学校図書館、地域の公共施設の活用

2 学習評価の充実

(1) 指導の評価と改善

(2) 学習評価に関する工夫

第 4 児童（生徒）の発達の支援（「子供一人一人の発達をどのように支援するか」）

1 児童（生徒）の発達を支える指導の充実

(1) 学級経営、児童（生徒）の発達の支援

(2) 生徒指導の充実

(3) キャリア教育の充実

(4) 指導方法や指導体制の工夫改善などに子に応じた指導の充実

2 特別な配慮を必要とする児童（生徒）への指導

(1) 障害のある児童（生徒）などへの指導

(2) 海外から帰国した児童（生徒）や外国人の児童（生徒）の指導

(3) 不登校児童（生徒）への配慮

第 5 学校運営上の留意事項（「実施するために何が必要か」）

1 教育課程の改善と学校評価（、教育課程外の活動との連携）等

2 家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携

第 6 道德教育に関する配慮事項

本論巻末資料(4) 小学校図画工作科「指導計画の作成と内容の取扱い」

（『第 7 節 図画工作』『平成 29 年 3 月 小学校学習指導要領』文部科学省、2017 より抜粋）

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ること。

(2) 第 2 の各学年の内容の「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導については相互に関連を図るようにすること。ただし、「B 鑑賞」の指導については、指導の効果を高めるため必要がある場合には、児童や学校の実態に応じて、独立して行うようにすること。

(3) 第 2 の各学年の内容の「共通事項」は、表現及び鑑賞の学習において、共通に必要な資質・能力であり、「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導と併せて、十分な指導が行われるよう工夫すること。

(4) 第 2 の各学年の内容の「A 表現」については、造形遊びをする活動では、(1) のア及び (2) のイを、絵や立体、工作に表す活動では、(1) のイ及び (2) のイを関連付けて指導すること。その際、(1) のイ及び (2) のイの指導に担当する授業時数については、工作に表すことの内容に担当する授業時数が、絵や立体に表すことの内容に担当する授業時数とおよそ等しくなるように計画すること。

(5) 2 の各学年の内容の「A 表現」の指導については、適宜共同してつくりだす活動を取り上げるようにすること。

(6) 2 の各学年の内容の「B 鑑賞」においては、自分たちの作品や美術作品などの特質を踏まえて指導すること。

(7) 低学年においては、第 1 章総則の第 2 の 4 (1) を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。

(8) 障害のある児童などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。

(9) 第 1 章総則第 1 の 2 の (2) に示す道德教育の目標に基づき、道德科などとの関連を考慮しながら、第 3 章特別の教科道德の第 2 に示す内容について、図画工作科の特質に応じて適切な指導をすること。

2 第 2 の内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 児童が個性を生かして活動することができるようにするため、学習活動や表現活動などに幅をもたせるようにすること。

(2) 各学年の「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、児童が「共通事項」の A と I との関わりに気付くようにすること。

(3) 「共通事項」の A の指導に当たっては、次の事項に配慮し、必要に応じて、その後の学年で繰り返し取り上げること。

ア 第 1 学年及び第 2 学年においては、いろいろな形や色、触った感じなどを捉えること。

イ 第 3 学年及び第 4 学年においては、形の感じ、色の感じ、それらの組合せによる感じ、色の明るさなどを捉えること。

ウ 第 5 学音年及び第 6 学年においては、動き、奥行き、バランス、色の鮮やかさなどを捉えること。

(4) 各学年の「A 表現」の指導に当たっては、活動の全過程を通して児童が実現したい思いを大切にしながら活動できるようにし、自分のよさや可能性を見だし、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養うようにすること。

(5) 各学年において、互いのよさや個性などを認め尊重し合うようにすること。

(6) 材料や用具については、次のとおり取り扱うこととし、必要に応じて、当該学年より前の学年において初歩的な形で取り上げたり、その後の学年で繰り返し取り上げたりすること。

ア 第 1 学年及び第 2 学年においては、土、粘土、木、紙、クレヨン、パス、はさみ、のり、簡単な小刀類など身近で扱いやすいものを用いること。

イ 第 3 学年及び第 4 学年においては、木切れ、板材、釘、水彩絵の具、小刀、使いやすいのこぎり、金づちなどを用いること。

ウ 第 5 学年及び第 6 学年においては、針金、糸のこぎりなどを用いること。

(7) 各学年の「A 表現」の (1) のイ及び (2) のイについては、児童や学校の実態に応じて、児童が工夫して楽しめる程度の版に表す経験や焼成する経験ができるようにすること。

(8) 各学年の「B 鑑賞」の指導に当たっては、児童や学校の実態に応

研究紀要 第40号

じて、地域的美術館などを利用したり、連携を図ったりすること。

(9) 各学年の「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導に当たっては、思考力、判断力、表現力等を育成する観点から、[共通事項] に示す事項を視点として、感じたことや思ったこと、考えたことなどを、話したり聞いたり話し合ったりする、言葉で整理するなどの言語活動を充実すること。

(10) コンピュータ、カメラなどの情報機器を利用することについては、表現や鑑賞の活動で使う用具の一つとして扱うとともに、必要性を十分に検討して利用すること。

(11) 創造することの価値に気付く、自分たちの作品や美術作品などに表れている創造性を大切にする態度を養うようにすること、また、こうした態度を養うことが、美術文化の継承、発展、創造を支えていることについて理解する素地となるよう配慮すること。

3 造形活動で使用する材料や用具、活動場所については、安全な扱い方について指導する。事前に点検するなどして、事故防止に留意するものとする。

4 校内の適切な場所に作品を展示するなどし、平素の学校生活においてそれを鑑賞できるよう配慮するものとする。また、学校や地域の実態に応じて、校外に児童の作品を展示する機会を設けるなどするものとする。

本論巻末資料(5) 小学校図画工作科 教科の目標、各学年の目標及び内容の系統表 (1)

(『小学校学習指導要領解説 図画工作編』平成29年6月 文部科学省、2017 年より抜粋)

第1目標		表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。			
	「知識及び技能」	(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。			
	「思考力、判断力、表現力」	(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。			
	「学びに向かう力、人間性等」	(3) つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を養う。			
第2各学年の目標及び内容	1目標		[第1学年及び第2学年]	[第3学年及び第4学年]	[第5学年及び第6学年]
		「知識及び技能」	(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して気付くとともに、手や体全体の感覚などを働かせ材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。	(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して分かるとともに、手や体全体を十分に働かせ材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。	(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を活用し、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。
		「思考力、判断力、表現力等」	(2) 造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて考え、楽しく発想や構想をしたり、身の回りの作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにする。	(2) 造形的なよさや面白さ、表したいこと、表し方などについて考え、豊かに発想や構想をしたり、身近にある作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにする。	(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、親しみのある作品などから自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
		「学びに向かう力、人間性等」	(3) 楽しく表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う。	(3) 進んで表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う。	(3) 主体的に表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養う。

絵本と造形・図画工作の基礎・基本と合科的・関連的な授業の考察

本論巻末資料(5) 小学校図画工作科 教科の目標、各学年の目標及び内容の系統表(2)

(『小学校学習指導要領解説 図画工作編』平成29年6月 文部科学省、2017より抜粋)

第2各学年の目標及び内容	2 内容	A 表現	「思考力、判断力、表現力等」	(1) 表現の活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。	(1) 表現の活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。	(1) 表現の活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
				ア 造形遊びをする活動を通して、身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に造形的な活動を思い付くことや、感覚や気持ちを生かしながら、どのように活動するかについて考えること。	ア 造形遊びをする活動を通して、身近な材料や場所などを基に造形的な活動を思い付くことや、新しい形や色などを思い付きながら、どのように活動するかについて考えること。	ア 造形遊びをする活動を通して、材料や場所、空間などの特徴を基に造形的な活動を思い付くことや、構成したり周囲の様子を考え合わせたりしながら、どのように活動するかについて考えること。
				[第1学年及び第2学年]	[第3学年及び第4学年]	[第5学年及び第6学年]
				イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、感じたこと、想像したこと、見たいことを見付けたり、好きな形や色を選んだり、いろいろな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えること。	イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、感じたこと、想像したこと、見たいことを見付けたり、好きな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えること。	イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、感じたこと、想像したこと、見たいことを見付けたり、好きな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えること。
			「技能」	(2) 表現の活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。	(2) 表現の活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。	(2) 表現の活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
				ア 造形遊びをする活動を通して、材料や用具を適切に扱うとともに、前学年までの材料や用具についての経験を生かし、組み合わせたり、切ったり貼ったり、形を変えたりするなどして、手や体全体を十分に働かせ、活動を工夫してつくること。	ア 造形遊びをする活動を通して、材料や用具を適切に扱うとともに、前学年までの材料や用具についての経験を生かし、組み合わせたり、切ったり貼ったり、形を変えたりするなどして、手や体全体を十分に働かせ、活動を工夫してつくること。	ア 造形遊びをする活動を通して、活動に応じて材料や用具を活用するとともに、前学年までの材料や用具についての経験や技能を総合的に生かしたり、方法などを組み合わせたりするなどして、活動を工夫してつくること。
				イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、身近で扱いやすい材料や用具に十分に慣れるとともに、手や体全体の感覚などを働かせ、見たいことを基に表す方を工夫して表すこと。	イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、材料や用具を適切に扱うとともに、前学年までの材料や用具についての経験を生かし、手や体全体を十分に働かせ、見たいことに合わせて表す方を工夫して表すこと。	イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、表現方法に応じて材料や用具を活用するとともに、前学年までの材料や用具などについての経験や技能を総合的に生かしたり、表現に適した方法などを組み合わせたりするなどして、見たいことに合わせて表す方を工夫して表すこと。
		B 鑑賞	「思考力、判断力、表現力等」	(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。	(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。	(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
				ア 身の回りの作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品や身近な材料などの造形的な面白さや楽しさ、見たいこと、表したいこと、感じ方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること。	ア 身近にある作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品や身近な美術作品、製作の過程などの造形的な面白さや楽しさ、見たいこと、いろいろな表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること。	ア 親しみのある作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、生活の中の造形などの造形的な面白さや楽しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること。
				(1) 「A表現」「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。	(1) 「A表現」「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。	(1) 「A表現」「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
		「共通事項」	「知識」	ア 自分の感覚や行為を通して、形や色などに気付くこと。	ア 自分の感覚や行為を通して、色や形の感じが分かること。	ア 自分の感覚や行為を通して、形や色などの造形的な特徴を理解すること。
			「思考力、判断力、表現力等」	イ 形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。	イ 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。	イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。